

W・W・W・W・H

—「哲学対話」の外にある世界と向き合うことについて—

木村進之介（ICU 哲学同好会）

1. 背景

本稿がどうして書かれるに至ったのか、その背景の説明のために、まず筆者がどういった形で「哲学対話」と関わることとなったのかについて軽く触れておこうと思う。

筆者は小惑星探査機「はやぶさ」ブームと東日本大震災が重なったタイミングで高校に入学し、二年次までは理工系への進学・就職を考えていた。しかし三年次に倫理の教科書をきっかけとして哲学・思想史に、近い人の死をきっかけとして実存主義に関心を持つようになる。そこで気付いたのが、周囲の生徒が、倫理をはじめとして彼らがセンター科目

で扱わない科目については関心を持つことも主体的に学ぶこともないということだった。出身高校には倫理・政経の学びと科学・技術の学びを連動させるカリキュラムもあったのだが、そうした取り組みが機能しているというわけではないようだった。これは理工系コースに進む生徒だけのことというようには思わない。倫理・政経の授業を受け持っていた教員の資質もそこまでよいものではなかったとはいえ、これは社会の構造的な問題なのではないか。受験や就職活動に関係のない科目に力を入れる「意識高い系」が奇異の目でみられることや、学校教育と塾の進学用教育の乖離、

その一方で学校教育の塾教育化といったことに対して、「教育の目的はどこにあるのか」「社会的な要請にとらわれない学問の楽しみを得られる場を増やすべきなのではないか」という意識を持ち、学際的な学問サークルとしての「研究愛好会」を始めようとしたがうまくいかなかった。しかしそのときの感覚を大学に入ってからも持ち続けた。

人は誰しも、立場や属性、環境の中に投げ入れられている。そして誰もが死ぬ。しかし誰もが社会や死といったものに向き合っているわけではない。そうした当事者性と、人はなぜ善や悪を行うのか（そして善や悪とはどういうものか）についても関心を持ちつつ、大学三年次に友人と「ICU 実存思想研究会」（のちに「ICU 哲学同好会」と改称）を立ち上げた。そのうち訳あって当事者研究という手法を知り、近代的な学問体系を相対化する視点を持つことで、「哲学カフェ」や「哲学対話」と

いった実践と関わることにもなった。

こうしたことから、筆者は哲学に限らず、学問や政治にかかわることに関心がなかったり苦手感があったりする人々と、「哲学対話」系の実践に意欲を燃やす人との、ギャップを埋めることができたらいという目的意識を持っている。以下では、「哲学対話」に対する筆者の違和感を言語化しようと努めた。

本稿の主要な問いは、「哲学対話」で対話と呼ばれている何かが、どのような機能を持っている（とみなされている）のかということであり、それが現状の「哲学対話」という名前のままでいいのかどうかということである。

2. 「討論と対話の違い」

2017年の12月2日に『学び合い』（@manabiai）というツイッターアカウントが画像付きで「討論と対話の違い。わかりやすい。」

論考の扉

という投稿¹をしたことが、当時は大きな話題となった。現時点で2万8千件を越すツイートと4万9千件のいいねを集めるこのツイートは、肯定的に受容されただけではない。「語の定義は正しいのか」「恣意的な論証ではないのか」といった批判もまたあった。コミュニケーションを表す言葉には「討論」や「対話」の他に「議論」や「ディベート」、会話といったものがあるが、それについてはおく。「対話」とはどういったイメージにおいて語られるものなのか。ツイート内の画像では「討論」の要素として、

- ・声の大きい人 有利
- ・違いがあれば攻める
- ・考え方が変らない
- ・自分の想像の枠を越えない
- ・気まずい雰囲気になる

という5項目を挙げ、それに対応させる形で「対話」の要素が述べられている。「対話」においては、

¹<https://twitter.com/manabiai/status/936874270138843139>

- ・声の大きさ関係ない
- ・なぜ違うのか？を探究する
- ・考え方が変わっていく
- ・想像を越え新しい世界を知る
- ・だんだん楽しくなる

とあることから、ここでは「討論」と「対話」が対比的なものとして捉えられた上で、「討論」より「対話」をよりよいものとして位置付けているように読み取れる。

このように『学び合い』が提示した図式においては、平等性の担保と差異性への関わりが、『学び合い』の考える「対話」とは何であって何でないのかを説明する上で不可欠な要素となっている。意見の違いをそのままでは放っておこうとはしない一方で自分の意見はそのまま変わらない（とにかく相手の意見を潰すことに尽力する）、という在り方ではなく、自他の違いを認めた上で、相手を屈服させることによって溝を解消しようとすることなく、むしろ自己の変容を許すことで対立の解消を試みる在り方が、「楽

しくなる」ものとして位置付けられている。これは、自分とは異なる立場を根拠付けるものについて知り、新しい思考枠組みと接触する際に起きる、自己変容の快樂（それは他者の他者性との出会いであるのみならず、自己の変容という現象を通じた自己の他者性との出会いでもある）を重視する立場といえる。

さて、いわゆる「哲学対話」（哲学カフェ、哲学プラクティス）方面の活動に関わっている、関わろうとしている読者の方々は、こうした考え方をどう思うだろうか。否定できないという人もいれば、違和感を持つ人、自分の取るべき立場を決めあぐねているような人もいるだろう。

もちろん、対話する者の間に権力性があることや権力性が生まれることで、場が暴力的な機能を帯びてしまう、ということに対する批判は既に多くの人が提出しているだろうし、それに対処する方法も考えられている。進行役に

よる各参加者の発言量のコントロールや、コミュニティボールの使用による、他人の話を遮ることの防止（コミュニティボールの使用には、場のテンポを落とす効果もあるという²。これは発言量のコントロールに役立つ）などはその代表例だ。

しかし、こうした「哲学対話」を巡る従来の議論の中で、「哲学対話」という枠組みそのものが問い直されたことがあったのかどうか、「哲学対話」やそれに類する技法を知って間もない筆者にはまだよく分かっていない。だがもし「哲学対話」を語る際に、例えば「「本当の対話」と「偽の対話」（もしくは「本当の討論」と「偽の討論」）があって、批判されているのは偽の方である」というような認識があるとするれば、それは危ういことではないだろうか。対話という枠組みや、権力性

²

<http://askoma.info/2014/10/03/875>

を排除してフラットになったとみなされたもの、それ自体がどういったものであるのかという議論が必要なのではないか。

3. 民主主義、多様性、対話

政治の世界で使われる用語としての「対話と圧力」では、立場の異なる者が合意に至るためのプロセスのうち、より緊張度の低いものについてを対話と呼ぶ。対話であっても圧力であっても、合意を形成するためのものであることには変わらない。しかし、圧力の場合は権力差を前提に自身の要求を一方通行的に押し通す側面が大きいため、そのぶん合意は形式的なものとなる。では、「対話と圧力」という枠組みで語られるときの圧力が相手に対して一方的な変化を迫るものだとすれば、対話は自国の態度変更を視野に入れたものなのだろうか？

日本国と朝鮮民主主義人民共和国の対話なるものがあるとき、そこでは「非核化に向けた努力がな

される限りにおいて」という条件付きでの経済的援助が取り沙汰される。これは、「対話と圧力」の圧力（経済的・軍事的な措置）とどれほどの距離を持つものなのか。そう考えたときには、対話という語の使用によって覆い隠されてしまう論点があるようにも思えてくる。

臨床哲学実践の場でいう「哲学対話」の意義については、複数の対立する言説がある。ここで筆者は「哲学対話」という語の持つ多義性を一つに集約するべきだと主張するわけではない。ただ、現状で「哲学対話」という語が曖昧であり、その多義性が「それぞれの場・参加者間で求められている方法を、それぞれの場でいろいろ試していけばいいよね」といったようなふわっとした認識のもとで問い直されることなく終わってしまう、ということに対する問題提起をしておきたいのだ。

例えば「哲学対話」が（カフェフィロ編『哲学カフェのつくりか

た』の「監修者のことば」にあるように) 民主主義の訓練として行われる場合には、違う立場にある者同士が、合意を導き出す前提となる議論のすり合わせができるようになることが目標であるとされる。

注意しなければならないこととして、こうした議論では往々にして、民主主義に全体主義が対置されている。民主主義と全体主義は相容れないものだろうか？ 全体主義と独裁主義とを同一のものとする場合はそうなるが、全体主義と独裁主義は必ずしも同じものであるとは限らないだろう。多数者の専制ということもあるからだ。民主主義とは、例えば君主や宰相や貴族や政党といった一部にのみ主権があるのではなく、地域・社会の構成員(=民)全体に主権があるという思想だ。そこに、立場の違い、多様性といった要素が必然的に結び付くということは本来ない。民主主義を下敷きにした制度に、上下関係で

はなく一人一票を原則とする平等主義の精神や相互尊重的態度を見出すとしても、あるいは全体主義に市民同士の相互監視と猜疑心に基づく非対話的態度を見出すとしても、「哲学対話」と多様性が直接的に関わりはしない。

この民なるものの範囲がどこまでであるか、どこまでであるべきかというような観点を持つときに、民主主義についての議論に立場の違いや多様性ということがかかわってくる。同質的な集団においては対話がより容易であるというだけで、対話の必要性がなくなるわけではない。対象となる集団の境界を決めるときに特定の立場性を持つ者たちが物理的に排除され、集団が均質化していれば、その社会集団の中で対話はあるうるが多様性はない。社会の中に複数の立場性がありつつ特定の立場性を持つ者たちが発言権を認められなかったり、不可視化されたり軽んじられたりするような場合、つまり民が同質的

なものとして捉えられる場合には、異議申し立てによる多様性の可視化が行われることを通じて、対話に向けた動きであったり、特定の立場性を持つ者に対する破壊や排除といった非対話的な措置であったりが模索される。いずれにせよ、平等を志向する民主主義が相互尊重的なコミュニケーションとしての対話を要請するとしても、立場の違う者同士が行うのかどうかという点は、自明の前提とはなり得ない。民主主義と対話の関係についての議論で立場の違いに注目するのであればむしろ、民主主義を望まない者たち、対話を望まない者たち、「われわれ」との対話が困難であるか不可能であると考えられている者たちとどのようなコミュニケーションが可能かということ争点とするのがよいのではないか。

一方で、同じ立場にある者同士、同じ立場にあると思っている者同士が、それぞれの現実的な生に

即して語られる語りを表明し合う中で、個人個人の多面性からくる差異が見えてくるということもある。他者の立場を知ることの面白さを求める場合には特に、こうした側面が重要になってくる（もちろんこうした方向性が合意形成のための役に立つこともあるだろう）。人は、相手が家族であっても他者について多くのことを知らないものだ。ましてや、見知らぬ者との交流を前提とする多くの哲学対話では、「同じ」を探すことばかりでいるよりは——それはときに内輪のノリとメンバーの固定化を発生させるだけである——「違い」を発見することによって得られるものも大事にしていく姿勢が必要となる。

しかし、テーマを即興ではなく事前に決めて集まる「哲学対話」の場合、興味関心によってある程度の共通性が生まれてくる（それがどこまで同質性に転化する／しないかは進行役や場が個々の

参加者の違いをどれだけ引き出せるかにかかっている)。そしてテーマの決め方にかかわらず、時間的余裕や金銭的余裕、アクセスのしやすさといった資本的要素によっても「哲学対話」は同質的な場となってしまう。古代ギリシアの民主政治と哲学的営みが女性と奴隷を市民社会から排除し使役することによって成り立っていたことを現代社会の諸問題と安易に重ねることはしたくないが、大学アカデミズムへの対抗文化としての要素を伴って生まれた「哲学対話」が、権威の相対化と平易な言葉の使用による敷居の低さをアピールし、開かれた学問の実践であろうとする中で、それでも一定の限界を持つという事は、「哲学対話」の目的に照らして常に反省されるべきことだ。

強調しておかなければならないこととして、筆者は現状の「哲学対話」の、制度的な部分を批判しようとしている訳ではない。多

くの「哲学対話」は無料であるし、少なくとも大都市に限れば、「哲学対話」系イベントが多くあるということによって、ある曜日や日時に行くことができないという問題は（大都市に限れば）解消される。しかし、「哲学対話」が意図せず発信してしまっているメッセージについて言えばどうか。

4. プラカードのジレンマ

たとえ話をしよう。投票による代表制議会民主主義を補完する市民活動にはデモ、街宣、署名活動、ストライキ、座り込み、集会などがあるが、そうした場で掲げられるプラカードや、通行人に向けた演説の言葉に気になるものがないとき、通行人は立ち止まってくれない。「結論は何か」に加えて「結論を支えるエビデンスは何か」が一度に分かるようなものでなければ、活動に参加する目的ではなく他に目的があって歩いている市民にとって、活動の趣旨をあまりよく知らなければ、そも

そも立ち止まるための条件は揃わない。しかし、情報量は一度に提示される情報が多いほど、受け手にとって処理は難しくなるし、少なければその分だけ説明不足や画一化、誤解といった問題が出てくる。

また、近年の政治運動の目指しているスタイルは、「若者にも開かれた」「カッコいい」「楽しめる」ものだ。「ダサさからの脱却」（それ、できてる？）や「政治運動の楽しさ」（それ、怒りがちゃんと伝えられる？）といった個々の方法論に対する疑問もあるが、今ここで問うておきたいのは、このような政治参加のハードルを下げようとする試みが、却って人を遠ざける結果になっていないか、ということだ。インテリ臭いものではなく大衆の知恵に根差したものをよいものとする、本来の意味での反知性主義は、単に「ハードルを下げる」ことによるのみ動員資源として取り扱えるようになるものではない。難し

い言葉があれば運動についていけなくなるのは確かだが、易しい・優しい言葉遣いや雰囲気押し出すことで、運動に新たに参加しづらくなる人がいるということも押さえておかなければならない。読書会における本の選定や学校のクラスでの授業では、「簡単なコンテンツを選ぶと進んでいる者にとってつまらなくなり、難しいコンテンツを選ぶと遅れている者が分からなくなり、中間に合わせることも容易ではない」ということがあるだろうし、よくできたゲームやギャンブルに中毒性があるのは、「簡単」と「難しい」のバランスが考慮されているからだ。民主主義社会を「習熟度別」という形で再構築することを望むのであれば別だが（これは現状の社会に格差、社会的カスケード、文化的断絶が存在しないという意味ではない）、こうしたことも踏まえておかなければならないだろう。

もし「哲学対話」があくまで多様性の中での対話を目指すのであれば、「多様な価値観を受け入れるための場のはずが、かえって排除を生んでいないか？」というオーソドックスな問いに加えて、（われわれが「哲学対話」のルールを度々見直す必要があるように）「われわれが、われわれの求めるコミュニケーションの在り方を表すのに「哲学対話」という語を使っていることは、どのような意味を持つのか？」という問いもまた、あって然るべきである。

哲学、そして対話という言葉が読者の方々にとってどのような手触りを持つものであるのかわからないが、少なくとも筆者にとっては、哲学という言葉の堅さと対話という言葉の柔らかさとは、取り合わせが悪い。一口では噛み砕けない程度に大きくぶつ切りにしたきゅうりが、井一杯の練乳に直接入っているようなものだ。柔らかくて甘いものが常に

快であるとは限らない³。対話という言葉から胡散臭さや鼻もちならなさを受け取る人間は、筆者だけではないのではないか。漢字の哲学をひらがなの「てつがく」やカタカナの「テツガク」としてみたり、宣伝に手描きのイラストを加えてみたり、そうしたことがどれほど「開かれた哲学」の実現に資するだろうか⁴。筆者にとっては大きな疑問である。

そして近年の政治運動では「個人であること」を強調する一方で、ワンイシューで頭数を揃えることが優先される。「哲学対話」は小規模なコミュニティでじっく

³民主主義の訓練以外での「哲学対話」の目的として、楽しさのためということがあろう。あらゆる人が「哲学する能力」を持っているとしても、あらゆる人にとって「哲学対話」が楽しいとは限らないこともまた、言うまでもない。

⁴紙媒体や電子媒体での発表において、漢字かな混じり文での読字に困難がある者への配慮として書字をかな書きやローマ字書きにする必要性はまた別な問題として残っている。

り話し合うので「頭数を揃える」というよりは熟議民主主義的な要素を多分に含むが、少なくとも形式上は「哲学をしたい者」かつ「ルールを守れる者」であればその他の属性は問わないということが前提されている。だが「哲学をしたい者」かつ「ルールを守れる者」に限定されたコミュニティが、その他の属性についてどれほどの多様性を確保できるだろうか。

前提として「哲学対話」への参加は任意であり、強制されるべきではないということはあるとして、「参加したい人だけが参加する」ことは、「哲学対話」の目的を相互尊重的態度、民主主義的態度の涵養、そして多様な人々の出会いを通じた個々の日常知の更新におくような場合、果たしているのだろうか？そして「哲学対話」の目的が何であれ、「どのような人が現状の哲学対話に参加したいと思っているか？」「どのような人が現状の哲

学対話に参加できる・参加しやすいか？」「「哲学対話」とは何のための対話なのか？」「誰と誰の対話なのか？」ということ抜きに「哲学対話」という言葉を使うことができるのだろうか？そうした問いを抜きにして「哲学対話」をすることそのものが悪いわけではない。だが、「哲学対話」という言葉を使い続けることについては、議論をすることで得られるものがあると思っている。

5. 終わりに

いくつかの事情により、本稿では予定していた内容のうち半分ほどしか書くことができなかった。「対話とは何か」という問いを考えるにあたって、筆者は当事者研究や自助グループにおけるコミュニケーション観、対話の身体性（まなざし）、最近注目を浴びている「中動態」概念（自己変容の快楽や、ニーチェの「ディオニュソスのもの」も含めて）、また本来の意味での反知性主義

論考の扉

やニーチェのインテリ批判、「分かる」「分からない」ということ、ポリティカル・コレクトネスなどとの関わりにおいて言語化しようとしてきたのだが、もしまた機会があれば、そうしたことについて検討してみたいと思っている。